

博士論文要旨

音楽研究科博士課程音楽専攻
器楽領域（ピアノ） 東山洗雅

本論文はマックス・レーガー Max Reger (1873-1916) がピアニストとして出演したコンサートレビューの分析を主な手法として、彼のピアノ演奏スタイルがどのようなものであったのか明らかにし、今日演奏の機会に恵まれているとは言い難いレーガーのピアノ作品、そしてピアノを含む室内楽や歌曲全般の適切で効果的な演奏解釈や、作品に対するより深い洞察を得ることを目的としている。

本論は4章から成る。

まず第1章では、レーガーの生涯をごく簡単に概観する。

第2章では彼がピアノのために残した主な作品について述べる。彼のピアノ独奏曲は大半がロマン派の小品集をモデルとしており、それ以外の作品も形式の点でバロック、古典派の伝統に則っているものが大多数である。しかし、特に中期の作品で頻繁に見られる大胆な和声進行や、後期の作品に表れている新古典主義の傾向などには、レーガーの作曲家としての革新性が表れている。また、ピアノを含む室内楽曲や歌曲など、彼がピアニストとして自作自演を行っていた主なジャンルの作品にも目を向け、その全体像と特徴を描き出す。第2章の内容は、彼の有名なオルガン曲や弦楽器のための無伴奏作品の陰に隠れがちなこれらの作品の普及を促すという点でも、一定の成果を上げるだろう。

第3章第1節では、レーガーの音楽教育歴を概観する。彼の音楽教育は両親による熱心な指導から始まった。また、オルガニストでもあったアダルベルト・リントナー Adalbert Lindner (1860-1946)、そして音楽学者フーゴー・リーマン Hugo Riemann (1849-1919) の指導は、レーガーの演奏スタイルに大きな影響を及ぼしたと考えられる。続く第2節ではレーガーの年代ごとのコンサートへの出演回数や主なレパートリー、そして演奏活動の理念について述べる。レーガーは作曲家、オルガニスト、指揮者としても活動したが、ピアニストとして最も多く舞台に上り、ドイツ国内外で精力的な演奏活動を行った。とりわけ重要なレパートリーはバッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750) とブラームス Johannes Brahms (1833-1897) の作品、そして自作であった。創作や演奏会のマネジメントに忙殺されながらも演奏活動を続けたレーガーは、音楽家としての自分自身の宣伝、音楽文化の振興、そして自作の演奏解釈の伝統を打ち立てるという理念に突き動かされていたと考えられる。

第4章ではコンサートレビューの分析を中心に、レーガーの演奏スタイルについて演奏家の視点から考察する。多数のレビューが一貫して描き出している具体的な特徴を探るとともに、共演者の証言、楽譜に見られる演奏上の指示、ピアノロールの録音なども参照する。本研究によって明らかになったレーガーの演奏の主な特徴は、以下の通りである。

(1) 全般的な特徴について (第2節)

- ・形式や構成の明確さ
- ・対位法演奏の巧みさ
- ・明確で表現豊かなフレージング

(2) タッチについて (第3節)

- ・際立った柔らかさ
- ・オルガンやピアノ以外の楽器を思わせるような、音色の多彩さ
- ・陰影やニュアンスづけの精妙さ
- ・持続力のある音
- ・ピアノを歌わせるような音

(3) ダイナミクスについて (第4節)

- ・極端なピアノッシモの頻繁な使用
- ・室内楽や歌曲の伴奏での控えめな音量
- ・中音量以下でのダイナミクスの繊細なコントロール

(4) テンポとリズムについて (第5節)

- ・比較的遅いテンポ設定
- ・遅いテンポでの曲の開始と、その後の加速
- ・曲中の急なテンポの変化
- ・自作の演奏指示とは矛盾するテンポ
- ・鋭さを欠くリズム
- ・ルバートの多用

(5) バッハの演奏解釈について (第6節)

- ・感情表現豊かなバッハ解釈

ピアニスト・レーガーは柔らかく感情豊かに歌うような演奏スタイルを持っていた。彼の演奏は特に多彩な音色や極端なピアノシモなどの点で特徴的であるが、概して後期ロマン派時代の一般的なスタイルから大きく逸脱するものではなく、その後 20 世紀を通して徐々に主流になっていく「楽譜に忠実な」演奏を理想とする近代的な演奏スタイルとは方向を異にしていると言える。

上に列挙した諸特徴はレーガーが求めていた響きや、演奏によって示そうとしていた自作の解釈を反映しているため、彼の作品を解釈するための手がかりとして大きな意義を持っている。レーガーのピアノ演奏スタイルを知ることは、複雑で難解とされる彼の作品を理解し、その魅力を発揮させるための重要な鍵である。